

■生きる力の取り戻し——南三陸町でのアート活動

吉川 由美

二〇一〇年のアートプロジェクト

吉川 皆さん、こんにちは。仙台から来ました吉川と申します。ご紹介を受けましたけれども、宮城県の南三陸町というところで震災前にたまたままちおこしという形でアートプロジェクトをやっております。南三陸は町そのものが丸々一個流出したぐらいの被害で流出度が非常に高いところですが、現在に至るまで支援活動を行なっています。



図7 2010年夏の南三陸

これは流される前の二〇一〇年の夏の南三陸の写真です(図7)。大きく分けて、被災したのは志津川地区、歌津地区、戸倉地区という三つの地区になっています。歌津町と志津川町が合併して南三陸町になりました。これは志津川地区です(図8)。このような古い美しい建物があつ



図8 志津川地区の昔醤油屋だった旧家



図9 志津川地区の上山八幡宮の中に飾られている「きりこ」

す。この辺にはたった一枚の白い紙からこういったものを作る、華がある習慣がありました。

たり、その家の庭はこうなっていて、この後ろに昔醤油屋さんだったところに蔵が並んでいたりします。これは神社のお宮の中です(図9)。私たちが「きりこ」と呼ぶ神棚のお正月飾りです。半紙を二つ折りにして、こういった縁起物を宮司さんが切って、暮れになると氏子に渡すという習慣があります。右側はお神酒です。左側は巾着です。要は、縁起物ですね。お金が儲かりますように、みんな安泰でありますようにという意味を込めて、いろいろな種類のもを神社、神社で切つて渡します。投網のような「エビスノヘイ」と呼ばれる御幣も一枚の紙から切り出すもので



図10 観光振興の職員たち

南三陸は観光振興にとっても力を入れていました。一番右端の後列に立っている方が役場の女性職員の宮川舞さんという方です(図10)。彼女が大変優秀な職員で、女性の視点で町を回遊できるような要素を掘り起こせないかということと一年間私が現地に入って、いろいろなプロジェクトをやしながら町の地域資源を掘り起こす活動をしました。

これは全員ではないですが、そのときに集まってきたメンバーです。おばあさんはこの家の住人です。この女性たちは半分が南三陸町で生まれた人ですが、半分はお嫁にきた人で、この人は若屋で育った人です。鮭漁を営む旦那さんと一緒にいたりしています。

こうやって町の人たちのところに行くと、その家で宝物にしているものごとか、あるいは何か古い時代のエピソードとか、そういうものを短く聞き書きしました。今森先生がおっしゃられた個人的な体験を深く聞くというものはありません。例えば、この家は旅館なんですけど、昔は料理屋さんだったそうです。川のほとりにあって、一番最初に魚市場ができたので、こ

の辺に料理屋と旅館が多いのはそういうわけなんだよという話を聞いたりしました。松月館という旅館です。そういう話を聞いて、みんなでできりこの様式を真似して、その家々のためのきりこを作りました。これは私が作ったもので、松月館ですから、松に満月です(図11)。すぐ前が船着場だったので、船を切り透かしたわけです。

これは一般の女性たちが切ったもので、旅館の女将さんのために考えた、おもてなしの心ということ、手のひらの上にハートが載っているデザインです(図12)。普通の人なのに、これをやり始めたなら、すごく楽しくなったみたいです。これも普通の人が作ったんですけれども、海苔屋さんの焼き海苔のマスコットでのり太郎といいます(図13)。

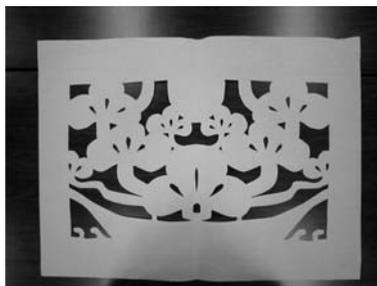


図11 松月館のきりこ



図12 おもてなしの心



図14 床屋の軒先のきりこ

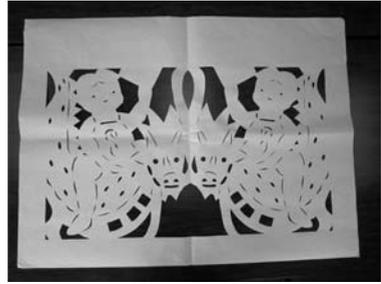


図13 のり太郎



図16 軒先にきりこを取り付ける役場の職員



図15 洋服店のきりこ

これは床屋さんで、これにもストリーパーがあります(図14)。大きな木枠のすごく素敵なクラシックな鏡がついている昭和な雰囲気の木屋さんです。そこのご主人は暇なときに竹で耳かきを削って、お客さんにプレゼントしていたんですね。その物語をここに切ったわけです。

こういったものを二〇一〇年の夏に六五〇枚ほど町に取り付けました。それぞれ「わー、うちのを作ってくれたんだね」ということで町の人が出てきているところです(図15)。これは役場の前につけているところです。川沿いにもこうしてつけました。これは役場の職員の方です(図16)。この人は産業振興課の課長さんです。皆さんも報道で知っていると思いますが、あの防災庁舎の屋上にみんな上って難を逃れようとしたのですけれど、五十三人のうち一〇人しか生き残りませんでした。課長さんも流されて、まだ行方不明のままです。

こうして六五〇枚のきりこを切りました。右側に黄色い紙が張り付けてあるのが見えると思います。こういうふうには、そのきりこはどういう物語なのかを書き出しています(図17)。涼しくなると町の人たちも出てきて、「ああ、このお店でそうだったのか」ということをみんなが共有することができました。

これはウォーキング・ツアーです(図18)。それぞれのきりこを見ながら回って歩くと、店の人が出てきて自分のところの物語を語ってくれるツアーです。これは佐藤仁町長です。この



図18 ウォーキング・ツアー

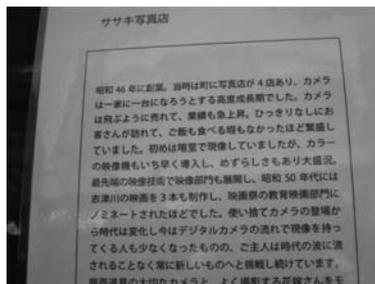


図17 きりこの物語



図20 神棚のきりこ



図19 旧家の馬のきりこ

とき一緒に回ってくれました。町ぐるみで、すごく面白くて好きだと思います。

一九六〇年にチリ地震津波というのがありました。長押のあたりまで津波が来て、流された家もありましたが、こういった旧家はそのときにも残ったんですね。数は少ないんですけど、この家は五〇〇坪の敷地です。こういった旧家には地元の皆さんも入ったことがなかったんですけど、このときに入れてもらって拝見することができました。この時すごくうまく行ったのも今考えれば、神様がとにかく最後までからよく見ておきなさいと言われたのかなとも思います。

これはさっきの醤油屋さんで、醤油樽のきりこを切ったんですね。これはその家の本物の神棚にきりこが飾ってあるところなんです(図20)。これは町で一番大きな魚屋さんで、全国と取引しているところです。(図21) 山内社長さんという方が、震災後リーダーとなって福興市をやっています。これは駅前にあるいっせんこ屋というか、トスケ屋さん「くじ引き屋」です(図22)。子どもが正座してくじ引きしているという、とても微笑ましいお店です。大人がくじ引きしたりするのも楽しいと、地域資源を発見して、次の回遊型の観光に役立てていくこうということができますごく盛り上がりました。これは宮司さんがきりこを作るのを見せていただいているところです(図23)。旧家でカフェをやったりしています(図24)。



図25 南三陸町の美しい景観

インクルージョンにもなりました。これをきっかけにして、今も親密につき合っています。例えば大連からお嫁に来た人には、このプロジェクトが第二の人生の始まりになったとも言っていました。これを通して、女性たちが町の一員になったと言えらると思います。

たくさんのことが実現したと思います。南三陸町は、美しい自然があるところで、この島が上がっていくと、タブノキという木が群生しています。葉っぱと葉っぱが重ならないので、上を見ると稜線ができるんですね。とても素敵なパワースポットだねということで、パワースポットツアーもやりたいねという話が出ました。

これで元気が出た女性たちが自分たちでアジアン・デイというのを企画しました。中国の切り紙をみんなで切りまして、町に飾り、衣装をつけて、中国の方がチャイニーズ・ティーをご披露してくださいました。これはお茶のそれぞれの特徴を説明しているところですね(図26)。これは韓紙といつて韓国の切り紙です。真ん中は町長さんです。みんなでコスプレして写真を撮ったり、とても楽しかったです。



図26 アジアン・デイ

一番手前の彼女は亜紀さんといつて、最も熱心に活動した人ですが、残念ながら津波で亡くなってしまいました。ご主人の目の前だったんですが、間に合いませんでした。おなかに四カ月の子どもがいたんですね。とにかく震災で全部流されてしまったので、私たちもあまりまともな写真がないんですけど、ご主人の元に届けました。本当にもうなんとも言えない気持ちで、思い出すだけでも心が痛んで、涙が出てきます。これは自分たちで企画したので、感涙にむせんでいるところですね。(図27)

そのほかにも、「私の美しい南三陸」というアートプロジェクトをやりました。自己紹介して、ほかの仲間たちが自己紹介した人にメッセージを一言ずつ書きます。それを自分の写真のボードに貼り付けて、好きだなと思う景色のところに下げていくプロジェクトです。(図28)これも、この町の風景が全部失われてしまう前になぜこんなにタイムリミットよく、と言ったらあれですけども、こういうことがやれたのかなと思っています。彼女は台湾・台北からお嫁に来た人です。さびれた風景がいい



図28 大連から嫁いできた優莉さん



図27 自分たちで企画したアジアン・デイが大成功に終わり、感涙にむせぶ女性たち



図30 防災庁舎 (3・22撮影)



図29 3・22に食糧支援に入った時の南三陸町

と言っていました。

その後、観光にはやっぱり女性を動かさなきゃならないから、みんなでスイーツを作ろうということになって、みんなで企画したりしました。二〇一一年二月二日に報告会をやりました。このように大盛況で、町長さんや観光協会長をはじめとして、一四〇人ぐらいの人が集まりました。彼女たちが取材した物語を朗読し、このきりこのプロジェクトを紹介しました。この年は志津川地区だけだったんですけど、来年はエリアを広げて、歌津地区とか、入谷地区という山側の被災していないエリアもあるんですけど、そちらにもきりこをとりつけないねということで大変盛り上がりました。

三・一一以降の活動

これが三月一日です。さっきの山内さんの息子さんが避難した中学校から撮った画像です。津波が既に入ってきています。志津川地区のこのエリアだけで一八〇〇軒の家が建っていたと言われています。志津川地区は二七〇〇戸のうち二〇〇〇戸が流されています。戸倉地区は六〇〇戸あるうち六〇戸しか残っていません。歌津地区は一四〇〇戸あったうち、七〇〇戸が流されたと思います。

今津波がまさに入ってきているところで、話題の防災庁舎は

これです。この上に避難している人も見えると思います。ここに志津川病院という大きな病院があって、ここにも避難している人が見えると思います。今はつきり防災庁舎の上に人が立っているのが見えると思います。「黄色い砂煙をあげて、バリバリバリって音が聞こえたんだ」と言っていました。手前は気仙沼線というJRの線路です。あつと言う間にこれ乗り越え、何も無い状態です。よくあそこの防災庁舎の上で人が一〇人も助かったものだと思います。

これが次の日です。三月になってこの海辺で雪が降るということはあまりないんですけど、非常に寒かった。これはさっきの山内魚屋さんです。何もなく、こんなにきれいにたたきしが残らなくて、店は数十メートル先にひっくり返っていたという事です。私たちがきりこのプロジェクトをやったこの町並みがこういうふうになったわけです。この島にも鳥居があったんですけど、すっかり形が変わってしまったぐらいやられてしまいました。(図31)

この町では建造物の七〇%が流出して、約八〇〇人の方がお亡くなりになっています。これは避難所の風景です(図32)。

真ん中は山内魚屋さんのご夫婦で、初めてお会いしたときから笑顔でした。彼らの避難所はものすごく優秀で、常に次にどう動いたらいいかということを毎日ミーティングして、食事当番もきちっとできていて、素晴らしい運営でした。

これは先ほどのきりこを作ってもらった阿部旅館という旅館の女将さんです。私が行ったときに、「せつかく来たんだから、泊まっていったらいいっちゃ」と言われました。女将さんなので、避難所にもおもてなししてくれるんだなと思いました。私たちが何かしてあげるとか、物を持っていくとかということよりも、彼らが早く私たちをもてなせる状況、私が喜ぶ状況になるためにお手伝いこそが支援活動だなと私は思いました。



図31 形も変わってしまった荒島



図32 避難所の風景

初めは炊き出しとか、ドクターやソーシャルワーカー、あと緩和ケアコーディネーターとかとチームを組んで避難所に入りました。私は緩和ケアコーディネーター養成のワークショップ・ファシリテーターをやっていた関係で、みなさんにご協力をいただくことができました。この膨大な人の数から言えば本当にささ

やかですけれども、お話を伺いました。

彼は及川さんとおっしゃって、このとき初めてお会いしたんですが、「じゃーね」と行こうと思つたら追いかけてきたんです。自分の家は高台にあつたので、家にいるほうが安全だから、自分の母親と奥さんにそこにいると言つて、彼は裏の山の畑を見に行つたそうなんです。それで、気づいたら家ごと二人はいなくなつたわけです。追いかけてきて、そのことを言つて、もう大粒の涙をポロポロこぼされた。周りのおじさんたちは「いーがら思い出させんな」と言つていたんですけど、「泣けるんだつたら、今ポロポロ泣いてたほうがいいんだよ」と言いました。

彼が次に言つたのは、「あの神戸の震災のときに仮設住宅に入つて、みんな寂しくて自殺したつて聞いてつから、おれはそういうとこさ入りたくねえ」つて。一人ですから、いつまでもこうやつて仲間にくまれていたいとおっしゃりながら泣いていました。でも、今元氣にしていらつしやるみたいです。

みんな劣悪な状態の避難所で海に流された人を守つておられるんですね。土地も避難所もないので、ほかの自治体に行つていてもらわないと駄目なわけです。だけど、みんなが全然動かない。まだ行方不明者が多すぎて、追悼式もできない。どうしたらいいんだということを立ち話で役場の人たちに聞きまして、これは民間の私たちが何か悲しみを共有する場を作らなければならないと思います。というのは、これは五・一一なんですけれ

ど、それまで悲しいとか、涙を流すとか、全く現地で聞かなかつたんです。隣の人がもつと自分より大変な思いをしているからとにかく笑つて頑張ろうというのだけしかありません。天皇陛下が来る、EXILEが来る、毎日お祭騒ぎなんです。これはものすごくよくない状況だなと思ひました。

それで、とにかく今帰らぬ人のいる海に思いを届けることを考えました。町の人たちと相談して、追悼するのではなく「思いを届ける」という言い方をしました。五月なので明るかつたんですけど、私もダウンを着ていますから寒かつたんですけど、キャンデルを持つていただいて、さっきの山内さんが津波の来る写真を撮つたポイントまでみんなに行つてもらつて、ずっと音楽家の演奏にのせて、歌つてもらいながら、それぞれ思いを届けました。

〈「五・一一南三陸の海に思いを届けよう」の映像〉

ギターと歌声が流れている。

アナウンス 間もなく南三陸町に津波が到達した時間となります。

お亡くなりになつた方々、いまだ海におられる皆様に変更でそれぞれの思いを届けましょう。

中学生たちにはつらかつただろうと思ひます。子どもには本当に申し訳なかつたかも、と思つています。たぶん三分の二の子どもが家を失つたと思ひますし肉親や親戚の誰かを失つている子もいます。だから、後で写真を見てみると、彼女の歌つて

いるのを聞けない子もいました。この時点では、瓦礫の中を歩いて登校しているわけですからね。

ラジオの声 亡くなられた方々を追悼する集会は今後も毎月一日に行なわれる予定です。南三陸町から中継でお伝えしました。

今の人はNHKのアナウンサーです。私は追悼式の演出をさせていただいているんですけども、この曲はいま追悼式でも歌詞を変えて、毎回必ず歌っています。思い出もあるけれど、ここから生きていこうという気持ちを込めて歌っています。

南三陸町の人は非常に明るい人が多いので、南三陸町の人らしい追悼の仕方をとということで、今頑張っている姿を亡くなった人に見せる追悼式にしようということでも今もやっています。これは集団避難先の山側の遠いところの温泉ですが、そこにユーストリーム中継を出して、七カ所ぐらいで中継しています。このことがきっかけになって、住民自身が追悼集会をやったりもしています。

このぬくもりを感じながら初めて海に向き合って、本当につらかったと思いますが、でも一日のたびに海に向き合う時間を作りました。(図33) これは六月ですね。七月ですね。八月で一番海に近づいたんですが、非常に怖かったです(図34)。「怖いな」とみんな言っていました。男の人たちも、私も怖かったですけれど。海を見ながらみんな泣いていました。左側は山内魚店の社長です。八月の時点で彼は、「海に全部持ってい

れたけども、今まで海で生きてきたんだから、海と一緒に生きていくしかないな」と言っていました。でも、役場の人で、



図33 海に向き合う (5月11日)



図34 海に向き合う (8月11日)

「まだ海を直視できない。にくたらしくてできない」という人もいっぱいいました。右側は町長さんです。毎回町長が非公式でおいでになって、いつも泣きながら挨拶してくれました。町長自身も公式には涙を流す機会はなく、ここは非公式の場なので、涙を流すことのできる数少ない場だったのではないかと思います。海で生きてきた人たちなので、だんだん海に近づいて、一人ぐらい海に投げられたりとか。こうやって語り合っていたりしました。

これはアメリカ人のアーティストで「ストンプ」というミュージカルの俳優さんです(図35)。ストンプって体で音を出すボディパーカッションで、そのワーク



図36 Tシャツの販売



図35 ミュージカル「ストンプ」に出演していた俳優のリックさん



図38 全国のアートNPOから送られたきりこは町の総合体育館に展示した



図37 流されなかった神社のきりこ

それからもう一回集まって切り紙を切るワークショップもやってみました。津波の絵柄のものができたりしましたが、こういう明るいものもあります(図37)。なぜか神社は流されなかつたんですよ。鳥居は流されても、お宮は一つもやられていないですよ。こういう笑顔のものもありました。私たちの活動を知っている全国のNPOの人たちが送ってくれたものを展示したりもしました(図38)。何かを見せるというのは、あまり効力もないと言つてもいいと思いますが、これは私たち支援をしている人の心を受け止めるという支援になつたかなと思いません。

ショップをやつてもらいました。PTA行事の中でやつて、たぶん震災後に自分自身に集中する初めての機会になつたのではないかと思います。自分の親と向き合つて、自分の身体に集中するというところで、彼らはとても気に入つたみたいで、このあと学芸会でも自分たちでボディパーカッションを作つて発表したりしていました。

二〇一〇年にきりこのワークショップをやつた女の子たちも散り散りばらばらに避難所にいたんですけれども、私たちが作つたTシャツを売つたりし始めました(図36)。自分たちでこういうものを作つて売ること、売つてお金を稼ぐというよりは、集まつて話をする場ができました。それがとても重要だつたように思います。

歌のワークショップ

その後、小学校で四年生中心のワークショップを行ないました。小学校が五つあるんですけども、本当にひどい被害でした。二つの学校を除いて浸水していますので、今も一つの学校に二つの学校が入って勉強している状態です。これは伊里前小学校です。震災後すぐに天皇陛下がこの学校の校庭で海に向かって頭を下げられたところです。これが伊里前のメインストリートで、こちらの山の高台の後ろのところに小学校があります。その一階部分まで水が来しました。これはバイパスです（図39）。ですから道は町内のあちこちで寸断されて孤立した状態になったわけです。



図39 バイパスの高架橋が津波で破壊され落ちた伊里前地区

これは伊里前小学校の四年生です（図40）。みんなで歌を作ろうというので、「大人の人たちも、みんなも頑張ってきたことってどんなことがあるかな」ということを出しました。例えば「少ない食料をやりくりした」とか、「みんなのご飯をみんなで力を合



図40 伊里前小学校の4年生

わせて作った」とか、「水くみを手伝った」とか、みんなが頑張ったことを出したんです。上の「ララソドレシレ」というのは、音符のカードを持って並び替えゲームをして偶然に作ったメロディです。

これは名足小学校です（図41）。もっと海側にある小学校で、ここは全壊して、伊里前小学校に同居しています。



図41 名足小学校の3・4年生

一番被害がひどかったのが戸倉小学校です。既にかんりの子どもが転校していて、男女比もバランスが悪くなっているんですけど、裏山に小さなお宮があつて、先生たちとそこに逃げたんですね（図43）。これが小学校です。完全に水没しました。このお宮の周りは全部海に。このお宮の前でたき火をしながら、四年生以下はお宮の中に入つて一晩過ごしたそうです。ク



図43 戸倉小学校の裏山にある五十鈴神社

子が、「家族に会えたとき幸せと感じた」と言ったのを今でも覚えています。「電気がついたとき」とか、「水が出たとき」と

「一年間本当に大変だったけど、小さな幸せってあったよね。今日よかったなと思ったことがあるよね」ということで、みんなに出してもらいました。たぶんこの子たちが一番この歌を大事にしているかもしれません。一番最初に手を挙げてくれた



図42 戸倉小学校

と教頭先生が、ぜひやってみようがいろいろということ、四年生でやりました。ここは「小さな幸せってあったよね。今日よかったなと思ったことがあるよね」ということで、みんなに出してもらいました。たぶんこの子たちが一番この歌を大事にしているかもしれない。一番最初に手を挙げてくれた

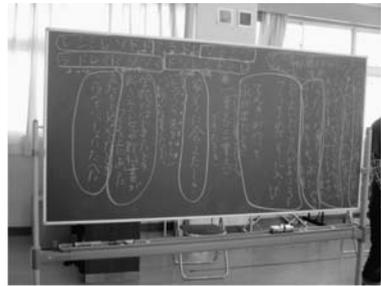


図44 歌のワークショップ

デイを作ったら、この学年はとて面白いメロデイになったんです。これが全部の歌詞です。

「小さいけれど大きなしあわせ」 作詞作曲 戸倉小学校四年生

家族に会えたとき しあわせ

電気がついたとき しあわせ

水道が出たとき しあわせ

友だちとひなんして

ごはんを食べた

自衛隊のおふろに

のびのびはいった

学校が始まったとき しあわせ

ランドセルもらったとき しあわせ

か、「友達と避難してご飯を食べたとき」とか、一つずつみんな出てきました。だから、今でも歌のどの部分が自分の歌詞か、子どもたちはみんなわかっています。僕の歌詞はここにあるとわかってるんですね。それをまとめて、こういうふうに歌詞にしていきました(図44)。同じように並べ替えゲームでメロ

たきだしが来たとき しあわせ

ラーメン カレー かき氷 たこ焼き

牛どん ソフトクリーム

フライドチキン やきいも

エグザイル エーケービー

清原 ジュディ・オング

サンドイッチマン コロッケ

サンブラザ エソラビト

いろんな人に会えた しあわせ

二重とび 三重とび

渡り鳥 とんだよ

鉄棒 マット運動

季節も回ったよ

みんなで がんばったこと しあわせ

明日を生きること しあわせ

ありがとう ありがとう

「自衛隊のおふろにのびのび入ったときにすごく幸せだった」

とか、炊き出しがきたとき幸せだということで、「何を食べたらうれしかったの」と言ったら、「ラーメン」とか、「カレー」とか、「ケンタッキー」とか、「ソフトクリームも来たよ」とか、いろんな人に会えたこと。有名人がいっぱい。EXILEとか、AKBとか、ジュディ・オングというのもあって、「ジュディ・

オング、みんな知ってるの？」と言ったら、全然知らなかったけど、そのとき初めてわかったと言っていました。「ちゃんとここ「II袖」を広げて歌ってくれた」と言っていました。結構韻を踏んでいて、おしゃれな歌詞になっているんです。「二重とび 三重とび 渡り鳥 とんだよ」と。季節の移り変わりもちゃんと入っていて、次は、「鉄棒 マット運動 季節も回ったよ」というところです。

でも、最後の何行かが時間の中でできなかつたんです。五月一日に新学期が始まったのでカリキュラムが終わらない状況で、本当にタイトな時間の中で、私は二時間しかもらえませんでした。二時間でこの曲を作ったことがもう信じられないんですけれども、このクラスに難病で盛岡の病院に入院しているお子さんがいました。K君というんですけれども、最後のところは、「先生、K君にお電話して、小さな幸せは何だったか聞いてもらえますか」とお願いしました。このクラスは先生も陸前高田のご出身で、おじいさんとお父さんが津波で流されたのかな。やっぱり被害が同じところに集中するんですよ。

その難病のお子さんに電話をかけたなら、「明日を生きることが幸せだと思う」と言ったらしくて、お母さんがとてもびっくりしていました。「たった一〇歳の息子が、明日を生きることが幸せだと言ったことがとても信じられなかった」と先生からメールが来たとき、私も本当に涙が止まらなかったですね。

全部聞くと一五分くらいかかってしまうので、部分的にお聞きいただきます。五つの学校で五曲の歌を作りました。最初は名足小学校です。自分の学校の自分の住んでいたところがどんなふうになれるか、どんな美しいところだったのか、みんなで思い出そうと言って、作りました。

「しあわせなみんなのまち」 作詞作曲 名足小学校三年一組・四年一組

海がキラキラ けしきがきれい
緑がいっぱい 桜もさいてた

やさしい人がたくさん住んでる

お年寄りはとても元気

ネコもいる

子どもなのにお年寄りのことを言っていたり、「ネコがいる」というところが子どもらしくていいなと思います。次が、先ほどの伊里前小学校で、頑張ったことを歌にしたものです。ここはフルコーラスで聞いてください。

「ファイト！南三陸」 作詞作曲 伊里前小学校四年一組

水くみ 手伝った

支援物資 運んだ

みんなのごはん 作った

みんなががれき かたづけ

少ない食料 やりくり

がれきは重い

水も重い

みんなで力合わせた

仕事場なくなった

負けずにお店つくった

がんばり働きたした

流れた船 ひっぱった

シロウオ サケ とった

ホヤ カキ ワカメ

種を入れた

みんなで力合わせた

「みんなで力合わせた」で「クレッシェンドするところがいつも泣かせるなと思うんですけどね。これは最後の戸倉小学校の歌です。これも一部です。

「小さいけれど大きなしあわせ」 作詞 作曲 戸倉小学校四年生

家族に会えたとき しあわせ

電気がついたとき しあわせ

いろんな人に会えた しあわせ

二重とび 三重とび

渡り鳥 とんだよ

鉄棒 マット運動



図45 震災から一年の追悼式 撮影：浅田政志

季節も まわったよ

みんなでがんばったこと しあわせ

明日を生きること しあわせ

ありがとう ありがとう

ありがとう ありがとう

震災から一年の三〇〇人ぐらいの遺族の方が集まっている追悼式だったんですけど、スタッフも私たちもみんな泣きながらこの曲を聴いていました(図45)。町の人たちが家と仕事場と公共施設のすべてを失っているの、とにかく流出度が激しいんです。神戸だったら、全部失った方もいらっしやると思いますが、職場が大阪にあつて職場だけはあるというパター

ンの人も多かつたと思うんですけど、この町においては、家も会社も工場も公共施設もみんないっぺんにならないわけです。だから、本当にどこから立て直したらいいのかわからない状況の中で、子どもたちがみんなが一年間頑張ったことをちゃんと讃える歌を作ったことはすごくよかったのではないかなと思います。この場に子どもを連れていっ

ていいのかという議論からありました。それから、「歌がそんな二時間やそこで作れるわけがないだろう。私は音楽教育三〇年間しているが、作曲コンクールに出す曲を夏休みからやっているけれど終わっていない。そんなのはできるわけないだろう」と怒られました。歌ができた瞬間にたぶん先生方は、追悼式に集まった人々の心に前向きな気持ちを届けられるということを確信しておられたのではないかと思います。山側の被災しなかった学校の先生は、この場に來て初めて何が起こったかがわかったのではないかなと思います。

一番うれしかったのは戸倉小学校の話です。この時期になるとものすごく津波の映像がメディアで流れますよね。南三陸ではあまりテレビを見せないようにいつも注意をしているんですが、でもやはり目に入るので、一周年に向けた報道攻勢でみんな具合悪くなつたらしいんですけれど、このワークショップをやった四年生はその時期もみんな元気に過ごしたんだそうです。戸倉小学校の先生方からその話を聞いて、私はすごくうれしかったですね。

頑張ってきた自衛隊の人も参列していましたが、この戸倉小学校の「自衛隊のおふろにのびのび入った」という歌詞で号泣していたらしいです。自衛隊の人たちも相当PTSDになっていると思いますが、記憶をポジティブに整理して、もう一回引き出しのしなうという意味では子どもたちの声と歌は本当



図46 瓦礫の片付いたエリア

に素晴らしいものだったなと思います。本人たちは全然あつてらんかんとしていて、何が起こっているのかはわかっていないと思います。でも、二分の一人成人式を迎えた、一〇歳の子どもたちなので、先生方は「彼らが二〇歳、本当の成人式になったとき、もう一回集まってこの歌を歌いたいね」と言ってくださいました。先生方のほうがこの歌が寝ても覚めても心から離れたかったらしく、いつも教室で泣きながら練習してくれたそうです。

これがあの一八〇〇軒の家があったエリアです。何もありません、今も全く変わっていない(図46)。瓦礫はきれいに片づいてはいますけれども。

二〇一二年のきりこのプロジェクト

この夏、もう一回きりこのプロジェクトをやりました。今生き残った人たちにもう一回話を聞いて、前のきりこのデザインも復刻しながら、新しいものは新しく取材して、仮設商店街に



図47 電気屋さん

掛けました。

これは電気屋さんです(図47)。ハイジという白い猫がいたんです。避難するときにハイジを二階に上げて、餌をいっぱいあげて、しばらく来られないかもしれないからねと鍵をご丁寧に掛けて避難した。当然全部流されたわけですね。店のそばにラベンダーの大きな株が咲いていたというので、この団子みたいなのはラベンダーです。電気屋さんの仕事道具のペンをハイジが持っている絵柄ですけど、ここの奥さんに「ハイジだよ」と持っていったら、やはり泣いていましたね。

こういうふう記憶を切り紙にして、紙を飾るだけじゃなくて、右側にありますけれども、アルミ複合板の看板にしています。これは歌津のほうです。歌津では二〇一〇年に、きりこのプロジェクトをやっていないのでこれしかないんですけれども、志津川地区のほうは流された家の跡地に、それぞれの家の物語を切った、あるいはいま生きている人の姿をコメントにして、こういうふうにも展示しています。

本当は八月二五日にこれを飾って、九・一一が終わったら撤

収する予定でした。流されて何もなくなった跡地にこういったものを立てていいのか。法律上許されるのかとか、いろいろなことを考えました。被災地はすごく不満が渦巻いていますから、「こんなのを立てやがって。誰が立てたんだ」とすごく怒られるのではないかなとも思いました。でも、一周年が終わったあたりから、みんなが自分が生活してきた土地を見ようとしなくなりました。つらいんでしょうね。草ぼうぼうで、「瓦礫がいっぱいあって、無残な自分の土地をもう見たくないという思いがあったと思うんです。本当に四月、五月に、このままではチリ地震津波から復活してきた自分の家の先人たちの記憶みたいなものも全部なくなってしまうのではないかと心配になるようなことがいっぱい起こりました。緊急雇用のお金がばんばん出てきて、みんながすごく忙しくなってきた、もはや過去のことを振り返らないようにしたいというような感じがあって、これはすごく危険だなと思いました。

それで、ぎりぎりまで迷って、七月にこれをやろうと思って、町の人に「やってもいいかな」と聞いたたら、「おお、やってける、やってける」と言われたので、一軒一軒もちろん確かめて、六一枚のパネルを立てたんです(図48)。今のは山内魚屋さんのお店があった跡地に立てたきりこボードです。先ほど言ったように、山内社長は福興市のリーダーで、本当に笑顔を絶やしたことがないんです。そして、一番最初に「おれたち海ととも

に生きてきたから、海とともに生きていくしかねえよな」と言ったので、あの言葉は私が書いて、ああいうふうに変えさせていただきました。

山内さんで日本酒の商品を出されたんですけど、そのラベルが私が作ったきりこのデザインになっています。これがお酒の商品として仮設商店街で売っています。

これはさっきも言った五〇〇坪の古民家です(図19・49)。五〇〇坪で昔馬場があって、すごく広い敷地だったんです。この女主人は流された後に一生懸命ヒマワリの種を蒔いていました。それで「この家の庭にヒマワリの種を蒔きました」という言葉を掲げました。九・一一にこのエリアで海に向けて、「南三陸の海に思いを届けよう」というコンサートをやりました。巨大なスピーカーを置いて海に歌を届けたんです。そのときまでにヒマワリが咲けばいいなと彼女は思っていました。この家ですね。中にはこういうふうに大きな神棚があって、彼女は一〇〇畳敷きに一人で寝ていたと言っています。こういう素晴らしい庭があって、奥に蔵があったり、大きな栗の木があったりしましたが、何一つ残っていません。ヒマワリはちゃんと咲きました。

これは阿部旅館さんです(図50)。旅館は廃業することにして、女将さんは流された着物を拾ってきて、洗って、仮設で吊るし、雛を切っています。この旅館も一五〇年ぐらい続いた旅



図50 阿部旅館



図48 各家々の方たちの姿を、海に届けようとすべてのボードを海に向けて展示した



図51 松月館



図49 古民家跡地

館なんですけれども、廃業しました。これは松月館です（図51）。「船と人でにぎわった町の記憶を未来へ」としました。

それから、青いTシャツを着た人が衣料品店の旦那さんです。彼の奥さんがここが私のふるさとだからと言ったので、ああいうふうに切りました。この方たちは泣いて喜んでくださったって、さりが立ったことを、「家が建つよりうれしいってば」と言っていました。斜め向かいに一個だけ立っているところがありますが、ここは障害者の息子さんともう一人の弟さん以外、家族が全員五人亡くなったんです。「家族がみんな亡くなったから、あの家にもさりが立ててける」と泣いて頼まりました。生きている人の姿を空に、海に見せようと思ってやったプロジェクトなんですけど、あそこだけは亡くなってしまったんだけども切りました。そうしたら、一昨日、私、お寺に行ったら、五人のお骨がたまたまあって、ああ、ご縁だなと思って、また涙が流れました。

さっきの伊里前小学校で子どもたちとさりが切るワークショップもやりました。例えばこの子どもさんはばあちゃんのためにヒマワリを切りました。「震災のときはあちゃんのお母さんが流されてしまったので、大きくて明るいヒマワリを作りました」とコメントにあります。もともと自分の家の神棚にさりを飾っていた家が三分の二以上、四分の三ぐらいいるんです。だから、



図53 災害ボランティアセンターへの住民の要請でできりを展示してあるエリアの草刈りが始まった

ら一〇〇人態勢で炎天下に草刈りが始まって、こんなにきれいに草刈りしてもらいました(図53)。みんな喜んでいました。九・一一にさきほどお話しした、コンサートと朗読をやりまして、この模様は災害FMのご協力で町内に流していただきました。とにかくそれ



図52 雑草が生い茂る志津川地区 8月下旬

学校でできりを切るとなったら、お父さんが絵柄を書いて持たせてくれた家もありました。こういうものを夏に立てましたが、私たち、草刈りもちょっととして、できりが隠されないようにやっただけですが、草ぼうぼうで駄目なんですよ(図52)。そうしたら、町の人が災害ボランティアセンターに「このエリアの草刈りをしてける」と要請してくれていたのです、次の日から



図54 家々の基礎の解体

この後、家々の基礎の解体が始まりました(図54)。ここは神戸だから、こういうのが駄目な人がいるかもしれませぬ。この間、この写真を見てすごく具合が悪くなった人がいるので気をつけてください。基礎を解体すると、もうどこが私の家か全くわからない状態になるわけです。ここを高上げするので、別に基礎を解体しなくてもいいらしいんですけども、とにかくお金の出方が目茶苦茶なので、土建屋さんも首をひねりながら

それに海に思いを届けるという会なので、誰に話すこともなく、音楽を流して、町の人たちが頑張ってきた物語の朗読を時々挟みながら、皆さんにお聞かせしました。この人は膳場貴子さんです。一日というとにかくマスコミがすごいんですよ。でも、なんだかとおちんかんかな取材をしています。膳場さんの取材はとても適格でしたが、マスコミのニュアンスのずれた報道のためにトラブルが起ることがあります。社社の宮司さんがそれぞれのきりこの写真を撮ってくれて、一カ所一カ所で和歌を詠んで、私に送ってくれました。本当にうれしかったです。



図55 満潮になると設営したきりが水に浮かぶように見える

やっているという状況です。これでどんどん基礎が壊され、更地になっていきました。大潮になると浸水するので、道路だけ嵩上げします。(図55)今、こういうふうになっていきますので、きりがなくなったら、どこに誰の家があつて、店があつたかわからないんですよ。今年は暴風警報が多く

て、三日にいったべんは暴風なんです。こんなおんぼろのボードなので、しょっちゅう飛びそうになったり、壊れたりしているんですけれど、基礎の工事で単管パイプを建ててくれた土建屋さんの社長が、風が吹いたら全部見回って、毎日のように補修してくれました。社員も補修してくれました。役場の人や町の人たちも、これがなくなると自分の町がわからないということ、今は志津川地区の風景になっていきたいと思います。

この間もお話したところ、流出地区にはもう住まないことが決定しているので、嵩上げが終わったら公園にしたいといろいろやっています。とにかく国の法律というのは、阪神・淡路大震災のときもそうだったと思います。元に戻すことにはお金が出ません。しかも公園を作るには人口に対して何へ



図56 満潮のときの写真

クタールという比率で決まるのだそうで、その地域に人が住まなくなっているのが公園にする金も全く出ない。だけど、町の人とは、このきりがちゃんとして立派な形であつて、家々のストーリーがもつとたくさん読めるようになつていって、さっきのタブノキは塩害にも強いので、タブの森があつて、椿の木をたどつ

ていくと高いところに逃げられる、そういうふうな町になればいいねとみんなで言っています。期せずして、精神文化を町の再生に生かすという意味で、内発的な町のグランドデザインに非常に寄与しているなという実感があります。これは二月十三日に海側から撮った写真です(図56)。基礎のなくなったところにきりだけが立っているわけです。あれがなくなったら、もう本当に人が住んでいたとは思えないような場所になっていきたいと思います。

チリとの交流

私は昨日までこのプロジェクトをしていました。マスクをし

ているのは、疲れて夕べ熱を出したからです。私はここまで、いかに住民の人が主体になれるか、私たちのやったことであっても、それがいかに住民のものになるかということだけを考えた。こういう活動をしてきました。町の人にはきりこを切る暇も全くありませんでしたので、いろいろな協力者、女子美の先生とか、友達にも頼んでこういったものを作っているんです。それは今、町の人ができないから、「大丈夫だよ、代わりに私たちがやっているから、できるようにになったら戻っておいで」という気持ちでやっているし、言ってもいます。

このきりこが、みんなが「取らないでくれ」ということから残るようになり、期せずして、町のグランドデザインの青写真が描けるところまで寄与している。そこに、みんなのものになってきたんだという実感がすごくありました。さっきの子どもたちの歌もそうです。みんなが自分自身がそこまで頑張ったことを誇りに思えばいい。ご先祖様のときも流されたけれど頑張つて復興したんだから、われわれにもできる。そういうふうに住体的に思えることのみをやってきました。

でも、チリ地震津波で友情を育んできた地球の真反対のチリという国と交流するという事業は国際交流基金に依頼された仕事として携わったんです。非常につらかったです。チリは二〇一〇年二月二七日にマグニチュード八・八の大地震が来ました。この町はコンステイトウシオンといいますが、高さ一五メートル

ルの津波が来た町です。この町の高校生と南三陸町の志津川高等学校が詩と歌を作って交換するプロジェクトをやるということとで高校にお願いに行きました。

このプロジェクトを受け入れてもらうことにはなったものの、毎回スクールバスでみんな通っているのに、スクールバスが出るまでの放課後の一時間しか時間が与えられないんです。私、ワークショップを一時間でやるというのはやったことがないというか、ちょうど盛り上がったところでぶつと終わるので本当につらかったですけれど、被災直後からの自分自身を振り返って、自分を何かに例える、あるいはそのときに焼きついている風景を書き出していくというところで詩を作りました。

それと同時に、子どもたちと一緒に、音符を並べ替えるゲー



図57 志津川高等学校

ムで旋律を幾つか作りました(図57)。そして、友達がどういうことを書いたか付箋で確かめ合つて、みんなの考え、みんなの思いを共有しました。クラス全員で書き出した言葉を並べ替えて構成しました。同時にチリの高校の皆さんに自分たちの夢を伝えようということで、それも詩に表しました。それがお手

元にある「はるかな友に心寄せて」という詩集です。後でご覧いただければと思います。

あちらの学校は必ずしも被災した子どもたちばかりではないので、被災した人たちにグループでインタビュウに行つたそうです。インタビュウしたものを主語を小犬に例えたり、被災した、例えばエミリオさんだったらエミリオさんに例えて、その人を主語にして、その人の被災したときの物語を書くということとで作文が七つ送られてきました。

長い詩を短く構成し直して、子どもたちの旋律をとつて、「春」「夏」「秋・冬」「今そして未来へ」「夢」という五曲の組曲を作りました。これはチリに送つたメッセージビデオです。チリはスペイン語なので、スペイン語の字幕がついています。

「青い空、青い海がとてもきれいな母の海がありました。三月一日の一四時四六分に地震が来て、一六メートルの津波がきました」。これは被災直後の町です。「七〇%の建物が流出しました。八〇〇人の人が亡くなりました」。これは防災庁舎ですね。

〈ビデオ〉

高校生の歌声が聴こえる。

男子生徒 やっぱり震災からつらいことかたくさんあった中でも、うれしかったことか、そういう全部含めて歌詞に乗せて。

女子生徒 同じ経験をした同世代の人つて、なかなかないと思う

んですよね。だから、そういう貴重な体験も共有できたらなと思いました。自分だけだと感情を押し殺してしまう部分もあるので、その解き放てる感じがよかったと思います。

男子生徒 こんにちは、志津川高等学校二年四組です。今回チリの皆様と交流することができて、非常にうれしいです。

女子生徒 皆さんの詩を読んで、私たちと同じ思いをした人が地球の裏側にもいるのだなと思いました。

男子生徒 今南三陸町は少しずつですが、復興へ向けて全力で頑張っています。

女子生徒 みんなで一緒に頑張りますよ。

全員 頑張りますよ。グーグー。

というのを現地で見ました。これがガブリエラ・ミストラル校です(図58)。向こうの高校生のコメントです。

〈ビデオ〉

「ガブリエラ・ミストラル高生徒のスペイン語のコメント」

この子は民宿をやっている家の子で、全部流されてしまったんですね。私たちはこの子の家に泊まりました。この日の夜にコンサートがあつて、夜中の追悼コンサートがありました。チリは詩の国だなどつくづく思いました。志津川高校のコメントと比べるとお恥ずかしい限りでございます。

これはコンステイトウシオンの町です(図59)。町中は元の姿が全然残っているんですけど、やはり海辺のほうに行く



図59 コンステイトゥシオンの町



図58 ガブリエラ・ミストラル高



図61 追悼式での演奏のあとケコさんとハグする高校生たち



図60 サンティアゴでのコンサートの模様

なくなっているところがあります。午前〇時半に日本から連れていったアーティストたちがコンサートを行ない、志津川高校の歌を届けてきました。ケコ・ユンゲさんという向こうで大変有名な歌手だった人がNGOで被災地の支援をしていて、夜の一二時半から四時ぐらいまで子ども先生もみんないらっしやって、コンサートを行ないました(図60)。それから、首都のサンティアゴでもこのようにコンサートが行なわれて、南三陸の高校生たちのメッセージを伝えてきました。

また被災地に行つて、歌のあるひとときを共に過ごしまして、「南部牛追唄」をここで歌つたら、この彼女は今パーパターオルを取ろうとしていますけれど、みんな涙が流れて、涙を拭こうとしているところですよ。東北の作業歌がすぐこの人たちに伝わったかなと思うと、とてもうれしかったです。あとはケコさんが有名人なので、みんなすごく喜んでいました。

これは最後のミーティングです。今日、まだ映像が私の手元に来ていないので、ないのですが、素晴らしい演奏をしてくださいました。時間のない中で、正直、無理やりやらされている感じを持った子もいると思うんですね。その中で追悼式典に行つて、そこで町長さんの式辞を聞いて、志津川高校の作った歌が町の人たちに大切なメッセージを伝えているということをつたぶん彼らは実感したと思うんです。

翌日の交流コンサートです。彼女たちは志津川高校の三年生

なんですけれども、こちらのお子さんはお母さんが流されているんですね。それでこれはガブリエラ・ミストラル校の曲を演奏するときに、向こうの高校生が語るところを日本語に訳して彼女たちにやってもらいました。大丈夫かなと心配したんですけど、素晴らしくやってくれました。ケコさんたちと交流して、本当に満足してくれたみたいなので、彼女たちの視野が広がって、世界にはいろいろな人がいて、いろいろな世界があるんだとわかるだけでも次に行く力になったかなと思います。志津川高校の生徒も、これから記録をもう一度反芻することで自分たちが何を成し得たかということをつぶし確信していくだろうと思っています。

最後の日、昨日ですけれども、漁師さんのところに行ったらちょうどメカブの収穫をやっていたんですね。民謡歌手が一緒にユニットに入っていたので、ここで「斉太郎節」を歌ったら、もうみんな常に歌っているのです、すぐ掛け声が出ました。

「前は海、後ろは山で」という民謡の歌詞が、海のそばで歌うとリアルだとわかりました。ここは水戸辺地区というところで、行山流水戸辺鹿子躍しむらびをやっているところです。集落全部がなくなっただけですけど、今映っているこのリーダーの人が鹿子躍をいち早く復活して、五月の連休には避難所で踊っていたんですね。全部流されたのに鹿子頭だけあったらしいんです。避難所の布団の布を使って、衣装を作っていました。

今回の高校生のプロジェクトはいろいろな人の立場を考えたわけではないかもしれません。私も初めて、被災者のことだけを考えるのではなく、この事業をやった国際交流基金の人やチリの人や大使館の人の満足も考えなければいけないというので、本当に大変でした。たぶん今後アートの支援していくときに、私がかんがえた大変さをクリアしないと、被災者が自分自身の体験としてこのプロジェクトを受け止めることができるようなプロジェクトを行うことはむずかしいのではないかと思います。だから、今後の被災地でのアートを通しての支援ということに関しても、支援をしてくださる事業を作っておられる各セクターの皆さんとも、事業を始める前にどういうふうにやっていくべきか考えていかないとならない。そうしないとコーディネートに入る人間が両者の間に入ってつぶれそうになります。チリ側のアーティストが作った曲はポップスのようなアレンジの曲で、太鼓のビートがきいた曲でした。向こうで聞いていて、追悼式典にこの曲が流れたら、「なんで追悼式にチリが関係あるんだ」と怒鳴られてもおかしくないと思います。追悼式典でチリとの交流で歌を交換しているということが、町の人にとっての必然になるように文脈を作っていくかなければいけない。本当に私自身がつかったです。私自身がPTSDになりそうな感じでした。明日報告会なんですけどね。

まだ今ちょっとげんなりしていますけれども、でもそれもい

い体験だったかなと思います。やはりそっちの方向じゃ駄目だということを確認して、とにかく元のスタイルに戻ろうと確信しております。すみません。すごくオーバーしましたけれども、私の話を終わらせていただきます。ありがとうございます。「拍手」

司会（石谷） ありがとうございます。お話の中で、いかにアート活動が記憶に向き合えるのかということがありましたし、歌を作ったり、きりこを作ったり、場所の記憶を語るという活動自体が、PTSDの問題を扱うのかそうでないのかということとを特別意識しなくても、自然に予防になっているという印象を受けました。

さらにきりこを海岸に立てたときに、それが町の人にとって意味のあるものだけではなくて、工事などで町にかかわる人々も意味のあるものとしてとらえられていく。そこにまさに公共化というものをどのように考えたらいいのか、あるいは町が新しく出発するときには町のランドデザインをどのようにとらえていったらいいのかという非常に本質的な問題もあつたかと思えます。

吉川 追悼式典にいらっしやっているんですか。

福田 はい。

吉川 チリの音楽が出てきたとき、大丈夫でしたか。違和感が

ありませんでしたか。

福田 福田雄と申します。そうですね……。少し字幕が見にくかったのですが、なかなか文脈が掴みづらかったところがあるところですが、高校生が声を合わせて歌っているところに心にくつと来るものがありました。

吉川 ありがとうございます。

司会（石谷） さらにチリとの交流ということも含めて、非常に国際的な広がりを持って、似たような災害体験をどのように共有していくのか。地域から世界へという大きな広がりもありました。ただ、支援者側としては、大きく広げるときにコンフリクトというか、気苦労なども強く感じられたというお話だつたと思います。

■問題提起と討議・質疑1

司会（石谷） 話が盛り上がって参りましたので、私からの話は討議のあいだにさせていただきますが「セラピストとメディアエーター」というお話を用意しております。まず簡単にメディアエーター（調停者、媒介者）という言葉を紹介しておきます。ヨーロッパでは、たとえばマニフェスタ・ビエンナーレというのが行なわれており、その中でアートの解説を行うエデュケーターの役割の人を指すのにメディアエーターと言う言葉が使われ